

『源氏物語』における顔之推作品の利用

——『顔氏家訓』と『冤魂志』『王範妾』——

石 井 公 成

一 『源氏物語』の典拠

『源氏物語』の典拠については、鎌倉時代以来、研究が積み重ねられてきたものの、最近になってようやく影響が明らかにになってきた作品もいくつかある。その代表は、昭和六十年前後からにわかに注目されるようになった『竹取物語』であろう。物語の始祖とされる『竹取物語』は、『伊勢物語』、『古今集』、白楽天の詩文などと違って、手本とすべき優雅な文学作品とはみなされなかったため、これまで無視されてきたものと思われる。このことは、優雅な文学作品以外の文献のうちに、他にもまだ重要な典拠となっている文献があることを示唆するものといえよう。ここでは、そのような典拠となる文献、それも『伊勢物語』につぐ重要さを有すると思われる文献を二つとりあげてみたい。一つは、六朝末から隋初に至る激動の時代に、敗戦による連行や命がけの亡命といった苦

駒澤短期大學佛教論集第九號 二〇〇三年十月

八七

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

八八

の葬式については儒教による簡素なものとするよう命じたのち、孟蘭盆時の供養を望んでいることが示すように、顔之推は、儒教を柱とする在家仏教徒の生き方を貫いた人物であった。帰心篇は、仏教に関する名文を集めた道宣の『弘明集』にも収録されており、道宣は帰心篇の文章を高く評価している。こうした儒仏習合の思想は、六朝末に盛んであり、日本でも奈良時代の著名な儒者、石上宅嗣、淡海三船、石川年足などは、同様の傾向を有していた。式部の父、藤原為時は、大学で学び、当時の代表的な詩文作者の一人として名を知られ、最晩年には出家していることから見て、為時もそのような人物であったことが推測される。

「王範妾」は、無実の罪で殺された者が恨みを晴らした類の話を中心にして応報譚を集録した『冤魂志』に見える小品である。道宣の兄弟弟子である道世が編集した『法苑珠林』百巻では、賞罰篇第九十一感応のうちに「王範妾」を初めとする八篇の『冤魂志』の説話をおさめ、「右此八驗出怨魂志」(大正五三・九六二下)として出典を示しているほか、随所で『冤魂志』の名をあげてその説話を収録している。道宣と道世の著作は、中国・朝鮮・日本で広く読まれており、唐代を代表する仏教百科事典である『法苑珠林』は、道世自身の『諸経要集』二十巻や宝唱等の『経律異相』五十巻などの經典要文集とならんで、研究・説教その他のための便利な書物として

難を重ねつつ、梁、北斉、北周、隋という南北の四王朝に仕えた文人、顔之推が著した『顔氏家訓』であり、もう一つは、同じ著者による『冤魂志』の中の「王範妾」である。

『顔氏家訓』は、晩年になってから、三人の息子たちのために、学問ある官人として生きるための心得と身につけておくべき教養とを書きしめたもの。唐代には、「家訓」と言えはこの『顔氏家訓』指すほど有名であり、以後の家訓書の模範となったという。日本では、遣唐使として唐で長く学び、奈良時代を代表する官人学者となって大学制度確立につくした吉備真備が子孫のために書いた家訓書、『私教類聚』が形式・内容とも『顔氏家訓』を手本としており、ほとんどの条が『顔氏家訓』の引用を含んでいることが知られている。

『顔氏家訓』の基調となっているのは儒教である。ただ、「帰心第十六」では因果応報を説いて仏教を信仰すべきことを強調しているうえ、遺言にあたる「終制第二十」では、自分

盛んに用いられた。他には、宋の太平興国年間(九七六―九八四)に編纂された『太平広記』が、「王範妾」を巻一百二十九に収めている。

藤原佐理『日本国見在書目録』では、『顔氏家訓』七巻を載せるのみで『冤魂志』は記載していない。このことから見て、『冤魂志』は、唐代には『冥報記』などに押されて単行本としてはあまり流布せず、また多くの話が『法苑珠林』などに収録されてしまったこともあって、早い時期に姿を消していったものと推測される。日本で「王範妾」を読んだ者たちは、おそらく、『法苑珠林』を通じて、因果応報を説く仏教説話として受け止めたことだろう。

「王範妾」と『源氏物語』とがきわめて類似していること、そして『顔氏家訓』も『源氏物語』に大きな影響を与えたことについては、前稿でごく簡単に指摘した。本居宣長は、『源氏物語』研究を大きく進展させる一方、『源氏物語』に見える仏教・儒教の影響を無視しようとし、以後の『源氏物語』研究に悪影響を与えたが、『源氏物語』は、よりによって仏教説話として受容されてきた応報譚と儒教の教訓書を、『伊勢物語』につぐ重要な典拠としていたのである。本稿では、『源氏物語』が登場人物の造型や場面設定については「王範妾」を少し変えたうえで『伊勢物語』の話に重ね合わせて利用していること、『源氏物語』全体における『顔氏家訓』利用の意義

などに留意しつつ検討してゆきたい。

二 『顔氏家訓』の利用

(a) 物語論

『顔氏家訓』の最初の章である「序致第一」の冒頭では、人々に忠や孝を初めとする言動の規範を教えるものとしては、古代の聖賢の書があつて完璧であるという。また、魏晉以来、多くの人が道理や実例をしるした同じような書物をたくさん著しているにもかかわらず、自分がこうした教訓書を書くのは、世間を導こうとするためでなく、あくまでも子孫のためであると述べ、人は同じ言葉であつても、身近で信頼している人の言葉を信用し、その命令に従うためであるとして、次のように説いている。

童子の暴誣を禁ずるには、則ち師友の誠めは傳婢の指揮にしかず、凡人の鬪鬪を止むるには、則ち堯・舜の道は寡妻の誨諭にしかず。吾れ、此の書が汝曹の信ずる所となり、猶ほ傳婢・寡妻より賢らんことを望むのみ。

すなわち、子供のいたずらをやめさせるには、師匠らの訓戒より子守女中の言いつけの方が効き目があり、凡人の争いをやめさせるには、「堯・舜の道」よりもそれぞれの愚妻の説教の方が効き目があるとしたうえで、私は、父親が書いたこ

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

八九

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

九〇

然である、と説いた箇所に見られるため、「三史五経に関わる事柄」などと解釈されている場合が多いが、「道々し」というからには、基本は「三史」ではなく「五経」であつて、つきつめれば顔之推の言葉に見えるように「堯舜の道」に関するものということになる。「三史」、すなわち『史記』『漢書』『後漢書』は、そうした道が行われたり無視されたりした歴史を描いたものなのである。

源氏のこの言葉については、最近では、物語一般に関する主張と見る説が有力となりつつあるようだが、『源氏物語』の作者が自らの作に関する本音を語った言葉と見るべきであろう。『源氏物語』以外では、総合巻で「深き心」があると評されている『伊勢物語』については、高く評価していたと思われるが、世に流布していた粗雑な物語のすべてが「道々しくはしきこと」を描いていると認めていたのではあるまい。ここで注意すべきなのは、既に指摘されているように、「神代より世にありけることを記しおきけるななり」という箇所は、最初の勅撰和歌集である『古今集』の仮名序を踏まえていることである。歌は神代からあつたとする仮名序は、和歌には六つの種類があると述べ、「唐の詩にもかくぞあるべき」と説いているが、実際には、六種というのは『詩経』大序が述べる詩の六義に基づくものにすぎない。和歌こそが日本の「斯道」であると宣言する仮名序は、和歌の方が漢詩より古い伝承を

の本がお前たちに信用され、子守女中や愚妻よりもいささか役立ってくれるよう願うのみだ、と述べるのである。冗談の形をとりつつ息子たちへの思いをこめた文章と言えよう。このように、わかりやすい例をあげつつ、ユーモアを交えて論じてゆくのが『顔氏家訓』の特徴だが、冒頭のこの箇所こそ、実は『源氏物語』蜚巻の有名な物語論の典拠にほかならない。

光源氏は、夢中になつて物語を書き写している玉鬘に対して、物語は作りごとを言いなれた人の口から出たものではないかとからかい、「いつわりばかり語っている人は、そのように受けとるのでしよう。私には真実のこととしか思えませぬ」と反論されると、物語をけなしすぎてしまったと言ひ、「神代より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそばぞかし」と述べ、これらの物語にこそ「道々しくはしきことはあらめ」と言つて笑つ。源氏は、「女子供向けであつて、うそばかりと思われる物語にこそ、聖人が示した道に関わることが詳しく示されているのだから」と述べているのである。「道々し」の語は、雨夜の品定めにおいて左馬頭が女性論に関する結論めいたことを述べた際、女が知ったかぶりをするのは見苦しく、また「三史五経、道々しき方」をすっかり体得するところまでいってしまつては可愛げがないものの、女の身でも漢文文献について多少は心得ていて当

持つかのように説くのである。ここには、日本の朝廷では漢詩が重視されて和歌が軽んじられてきたことに対する反発が見られるだけでなく、中国への屈折した対抗心がうかがわれ¹⁰⁾。『古今集』が血肉化していた式部、しかも、『古今集』を編纂した貫之や躬恒を保護した高名な歌人、藤原兼輔を曾祖父に持つことを誇りとした式部は、冗談に託して上記のような凶式を物語にあてはめたのであろう。すなわち、『日本書紀』などは、一面的であつて物語に及ばないものであり、日本の物語にこそ「斯道」がきちんと、それも分かりやすく示されているのだと、冗談に託して主張したのである。式部は、身内を対象として書かれ、子守女中や山の神の説教よりやましといった程度のはずの『顔氏家訓』が、実際には中国でも日本でも知識人たちに歓迎され、大きな影響を与えたことを知っていた。しかも、蜚巻を書く頃には、大評判となつていた『源氏物語』の巻々を男性貴族までが読むようになりつつあつたのだから、「物語を文学ジャンルとして確立し、すべて形式の上に置くのだ」といった近代的な意識はなかつたにせよ、式部が自らの作品にかなり自信をいだいていたとしても不思議はない。

実際、本紀のみであつて個性ある個人の活動を生き生きと記した列伝を欠く『日本書紀』は、正史としては不十分であるうえ、『漢書』や『後漢書』などを切り貼りして作り上げた

部分が多く、出来のよいものではない。また、呂後の密通によって始皇帝が生まれたことを明記する『史記』と違って、式部が関心を持っていた「密通による王者誕生」といった類の出来事は描こうとしないのであるから、三史に親しんでいた式部¹⁾としては、『日本書紀』を不満に思っただけでなく、式部の『日本書紀』批判は、儒教的な勸善懲惡という立場で、つまり男の目から書かれた中国・日本の文献すべてに対する批判という面をも多少は持っていたと思われる²⁾。

(b) 空蟬のモデル

『顔氏家訓』では、「序致第一」の後に、きびしい教育の必要性を説いた「教子第二」、兄弟関係の重要性、兄弟の嫁同士が争いやすいことなどを説いた「兄弟第三」が続く。再婚を論じた「後娶第四」と家庭経営を説いた「治家第五」では、南地と北地における風習、特に女性のあり方を比較しつつ教訓を述べているため、一種の女性比較論となっている。後娶篇では、本妻と妾の子を区別せず、本妻が亡くなったあとは妾に家事を担当させることの多い南地と違い、北地では側室の子を卑しむため、妻が亡くなると正式に再婚せざるをえず、三度四度と結婚するうちに、「母の年、子より少き者有り」ということになり、しかもその時の正妻である後妻が重んじら

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

ったようだとされている女であろう。『伊勢物語』の場合、「世人」と違ふというのは、また心がまさっているというのは、恋愛の情趣を解するという意味であり、結局は男にとつて都合のよい女を指していた。ところが、空蟬の場合は、恋愛の情趣を解する女という図式を引きずりながらも、軽んじられて男の思うままに扱われることは拒否しようとする、意志を持った女性として描かれているのである。さらに、空蟬は、『伊勢物語』第一段の「いとなまめいたる女はらから」の垣間見という設定も承けており、色っぽい様子をした軒端萩と女二人で碁を打つところを若き源氏に垣間見られている。『源氏物語』は、二人を美女姉妹とはせず、年若い後妻と亡き先妻の色っぽい娘という取り合わせとしたのである。また、『顔氏家訓』では先妻の子と後妻、および、先妻の子と後妻の子は対立するのが常とされているものの、『源氏物語』では、先妻の子である紀伊守は若い義母である空蟬に対して下心をいだいているため、後妻の弟である小君を可愛がって連れ歩いているとされている。

このように、空蟬の場合は、『伊勢物語』の設定のうえに、顔之推の作品に見られる設定を、それもその一部を逆にするなど多少変更したうえで重ね合わせている。後述するように、これは、藤壺、空蟬、夕顔、六条御息所、源典侍、朧月夜に、つまり、源氏および他の男と関係を持った女性たちのほとん

れる結果、「後母の弟と前婦の兄」とでは、貴族と賤民の違いほど待遇に差があるのが常であるため、主人が没すると、先妻の子が「後妻は実際には妾にすぎない」と主張し、後妻の子が「亡き先妻の息子というのは雇い人にすぎない」と主張するなど、醜い訴訟合戦、非難合戦が頻繁に起こるとい

う。「後母の弟と前婦の兄」とは、後妻の年少の息子と先妻の年長の息子を指すが、「後母の弟」を文字通りに受けとって「後妻の弟」と読みかえると、多くの子供たちを有する年老いた受領、伊予介の後妻となった空蟬と弟の小君が想起されよう。女性論議に続いて、亡き先妻の息子より若い後妻とその弟が登場するのは、雨夜の品定めについて登場する空蟬の設定そのものである。伊予介が没したのち、先妻の息子である常陸介に懸想されて空蟬が出家してしまうのは、主人が没すると先妻の息子と後妻側との間で醜い騒ぎが起きるとする『顔氏家訓』の記述を、『源氏物語』の主要なテーマである「義理の親子、ないしそれに近い間柄の男女の恋」という設定にしたがつて変えたものと思われる。『源氏物語』は、現実の生々しい争いは描かず、すべてを恋の話に置き換えるか、恋物語の背景としてほのめかす程度にとどめている。

なお、空蟬という女性を造型するにあたって最も重要なのは、『伊勢物語』第二段の女、すなわち、「世人にはまされりけり。形よりは心なむまされりけり」と評され、一人身でなか

九一

九二

どに当てはまることである。『源氏物語』の中でも特に印象深い空蟬の心理描写については、自分とほぼ同年齢である息子のいる年配の男と結婚し、娘を生んだものの夫とはすぐ死に別れ、しかも弟がいた式部自身の体験が反映されていることは、これまでに指摘されている通りである。式部は、『伊勢物語』と顔之推作品を重ね合わせて人物を造型したうえで、中国・日本の文学作品や史書、伝承、見聞、体験その他を材料として肉付けし、さらに式部ならではの詳細な心理描写を行うことによって、その人物を生き生きとした存在に仕立ててゆくのである。

『顔氏家訓』の影響は、人物や場面の設定ばかりでなく、個々の表現についても見られる。空蟬の場合は、小君が源氏の素晴らしい風貌について報告すると、「昼間であれば私ものぞいて拝見するのに」とだけ「ねぶたげに言ひて顔引き入れつる声（眠そうに言いつつ夜具に顔を引き入れてしまったらしい様子の子の空蟬の声）」が聞こえたため、源氏は、もつと関心をもってあれこれ尋ねてほしいと不満に思ったことが記されている。これは、上記の勉学篇が、世間の人が「人を識ること多く、事を見ること広きを欲し」ておりながら、読書に励もうとしないなら、それは、満腹しようとしていながら料理を怠け、暖かさを求めていながら裁縫を怠るようなものであり、「猶ほ被を蒙りて臥すが」ときのみ（夜具をかぶって寝て

る。

(c) 比較論議の手法

女性論、教育論、物語論、仮名の書に関する論、和歌論、音楽論など、『源氏物語』のあちこちで述べられる論は、『顔氏家訓』における教育論、書道論、その他の様々な論にならったもの、ないしヒントを得たものである可能性が高い。その最初の論となった女性の品定めという発想については、『顔氏家訓』における南北の女性の比較論を受けていると思われる。たとえば、右で見た後娶篇における南北の結婚制度の違いに加え、『治家第五』では、江南の婦女は夫側と妻側の親戚でもほとんど交遊しないのに対して、北地では主婦が家を仕切るものであって、裁判の訴えも権力者への請願その他も主婦が担当し、車に乗って役所に向いて行って子供や夫のために運動するといった、実に興味深い比較がなされている。中国におけるこうした南北の女性の違いを、上・中・下の品の女性の違い、および、興味深いという「中の品」の女性の多様さに関する議論に転じてみせたのが、雨夜の品定めであったと考えられるのである。先に見た蜚語の物語論と雨夜の品定めとがある程度共通した面を保つことは、両者がともに「道々しきこと」を問題としていることから知られる。また、「中の品」に対する高い評価は、『顔氏家訓』の「止足第十三」

九三

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

「中の品の女に関する論議を聞いてかきたてられた関心をさらに強めさせる言葉となったのである。この箇所は、雨夜の品定めが『顔氏家訓』を盛んに用い、また博士の娘のところでは白居易の「議婚」の詩を利用して面白おかしく描くなど、漢文の典拠を自由自在に使用して面白おかしく描くなど、のである。なお、勉強篇のこの箇所の前後は、後述するように、夕霧の教育に関する源氏の言葉の中でも用いられており、作者がいかに『顔氏家訓』に馴染んでいたかを示している。

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

九四

が、「天地鬼神の道は、皆な満盈(完成)を悪む」ため、仕官して泰らかでいるには「中品に処るに過ぎず」と論じている箇所を踏まえていよう。『源氏物語』は、学問・政治などに関する議論を、すべて恋の話に転じて利用しているのである。

雨夜の品定めでは、左馬頭が木工や絵画や書道などをたえにした際、本当の名人と表面だけきどってみせる者との違いに触れ、空想に基づくおどろおどろしい風景・獣・鬼などでなく、日常よく目にするありふれたものを線描きで巧みに描いてこそ名人だと言っている部分は、『顔氏家訓』の「雑芸第十九」によっていると思われる。すなわち、雑芸篇が、梁の元帝は絵の名人であって、蟬・雀・馬などを並外れた巧みさで描き、また武烈太子は、目の前の人物を真に迫る形で手早く描いたと述べているのを受けているのであろう。また、左馬頭が、書について「ここかしこ、点長に走り書き」して風情ありげに見える人は本格的な書法の名人に及ばないと述べた場面は、雑芸篇が絵画論の直前で書風の変遷を論じ、南地ではかつては法式にかなった見事な書が書かれていたのに、やがて「一字を為すに唯だ数点を見し、或いは妄りに斟酌(勝手に画数を加減)するような、一人よがりの気取った書風が盛んになったと批判している箇所を踏まえていよう。

書道論議については、『源氏物語』の仮名論議と『顔氏家訓』の類似が注目される。何事も昔の方がすぐれていて現代は劣

った時代であるとするのが、『顔氏家訓』と『源氏物語』の共通した立場だが、梅枝巻の仮名論議では、すべて浅くなつてゆく末の世の現代において、仮名の書だけは昔より見事になってきた、と源氏が述べている。これは、昔の文章は風格度量の点で現代の作に遙かにまさっているが、「音律」が整い、対句の技巧をこらし、文章上の忌みごとを避けている点では、最近の文章は古人の作よりすぐれているとする『顔氏家訓』の「文章第九」を思わせるものがある。また、雑芸篇では、書道・絵画・音楽その他の芸を論ずるにあたり、その名手たちをたたえ、これらの芸にひいでるのは望ましいこととしつつも、その面でのみ名を知られ、便利がられて「常に公私の使命をこうむ」るばかりであるのは恥だとして戒め、その例となる人物を幾人かあげている。これは、源氏の異母弟である兵部卿の宮が、絵合わせや薫物合わせの判者としてしばしば呼び出され、また明石姫君の入内に際しては、仮名による草紙作りを依頼され、源氏の四十の賀では琴や琵琶を弾いていることを思わせる。宮は自らの仮名の書に自信をいだいており、源氏もほめたてているものの、兄の娘の入内にあたってお土産作りを手伝わされているにすぎないという点では、軽んじられているとも言えるであろう。

なお、吉備真備『私教類聚』では、『顔氏家訓』が雑芸篇の中でまとめて論じている項目について、それぞれ条を立てて

論じており、『源氏物語』はこれに近い。

(d) 教育論と密通

『顔氏家訓』中で最も長く、全体の中心でもある「勉学第八」が力を入れて論じている教育論については、少女巻において、息子の夕霧をあえて六位という低い身分から出発させて大学で学ばせた源氏が、その処置を不満に思う大宮に弁解して述べる学問論に大きな影響を与えている。まず、源氏が、自分は父帝から手ほどきを受けただけであつたため、「何ごとも広き心を知らぬ」うちは、文章も音楽が至らぬところが多かったと述懐した箇所は、勉学篇が、世間の人は「事見ることと広きを欲」していながら読書不足で不十分だと述べた箇所を受けていよう。勉学篇のこの箇所の少し後のところに、先に見た「猶蒙被而臥耳」の文が見えているのであり、これらの箇所はすべて『私教類聚』の「可勤学文事」の条に略抄して引かれている。

源氏が、高家の子弟は官位など思うようになるので学問しないと批判し、学問が無い場合は、後見する人に死に別れ、運勢が下ってきた末には、世間の人に軽んじられてしまうと説いた箇所は、勉学篇が、「梁朝全盛の時、貴遊の子弟は多く学術無し」として例をあげつつ痛烈な批判を展開し、「父兄も常には依るべからず、郷国も常には保つべからず。一旦流離

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

含む『史記』を教えるにすぎたというのが第一の原因であつたと推測される。平安初期の大学では、経書の研究より文学・歴史の研究が盛んであつて、紀伝道が中心となつていたこともあろうが、夕霧が大学に入って『史記』を学んだことが強調されているのは、偶然ではない。

ここで想起されるのは、式部が中宮彰子に『白氏文集』の講義をした際、彰子の父である道長が「さるさまのこと」を中宮に知らせたい様子であつたと『紫式部日記』に記されていることである。以後、『白氏文集』の中でも諷刺の強い樂府をこつそり教えるようになったことから見て、「さるさまのこと」とは、単に漢詩文の教養のことではなく、漢詩文に見える上記のような教えにくい事柄のことを指すのではなからうか。実際、『源氏物語』における「さるさま」の用例については、男女の関係に関するものがほとんどである。この推定が正しければ、道ならぬ恋の話がたくさん書かれている『源氏物語』、それも中宮の密通・懐妊の話まで描かれている『源氏物語』が、道長の後援を受けて選りすぐりの紙に清書され、道長の娘たちがいる宮中で読まれるようになっていく理由の一部が推測されることになる。このことについては、白楽天や顔之推などの姿勢、物語作者の意図と有力な受容者の思惑の違いなどにも注意しつつ、慎重に検討してゆく必要がある。式部は日本版の新樂府や『顔氏家訓』を書くようとして「源

すれば、人の庇廕する無し、まさに自らこれを身に求むべきのみ」と強調している箇所を受けていよう。顔之推は、戦乱が続くそうした激動の世において、学問だけを頼りとして必死で生きぬいた人物であり、ここで述べられているのは実際の見聞ばかりであるだけに、説得力がある。源氏は、あくまでも一般論を述べているようだが、須磨下りを経験している源氏は、藤壺との密通による冷泉帝誕生という事態がいつか発覚し、夕霧が地方に追われるといった最悪の場合をも想定していたのであろう。源氏の栄華は、常に薄氷の上にあるものとして描かれている。

源氏が我が子をあえて大学に入れて学ばせたことについては、ほかにも密通ならびに『顔氏家訓』の記述と関連する点があるとと思われる。それは、「教子第二」が、君子が子供に自ら教えない場合があるとし、経書には、「諷刺」「悖乱」の類、男女の交わりのたとえなど、親としては教えるににくいことも書かれているからだ、と説いている点である。雨夜の品定めが女性ですら少しは学ぶべきだとしていた「三史五経」のうち、そうした教えるににくい事柄の代表は、様々な密通事件、とりわけ呂后が密通してできた子が始皇帝となった事件であろう。源氏は学問・詩・音楽・書道・絵画など、すべてに通じた天才とされている以上、夕霧の教育を自分で担当することなど簡単なはずであるのに、そうしたしなかつたのは、呂后の記事を

氏の物語」を書いたのではないだろうが、結果としてそうなっている箇所、時には意図してそのように書いた箇所があることを、我々は認めるべきであろう。一切の倫理・教訓を否定する文学至上主義は、式部が親しんだ顔之推や白楽天などの立場とは縁遠いものである。また、中国においても日本においても、最後に儒教や仏教の教訓さえ付ければ、濃厚な恋愛場面でもとんでもない密通話でも語ることができたという点も忘れてはなるまい。『源氏物語』は仏教や儒教の教えを説いたものとする近代以前の説も、仏教・儒教の倫理をひたすら排除した宣長の「もののおはれ」論も、一面的すぎる議論にすぎない。

(e) 天眼への恐れ

『顔氏家訓』の教訓を恋愛の場で使った例の代表は、「天眼」への恐れであろう。『顔氏家訓』は儒教を基調としておりながら、「帰心第十六」は因果応報を信じて仏教に帰依すべきことを繰り返して強調しているが、そこでは、三世因果を信じない人々に対して、次のように説いている。

世に魂神有り、夢想に示現し、或いは童妾に降り、或いは妻孥を感ぜしめ、飲食を求索し、福祐を徴須すること亦た少からずと為す。今、人、貧賤疾苦あれば、前世に功業を修めざりしを怨尤せざる莫し。……凡夫は蒙蔽し

て未来を見ず。故に彼の生と今と一体に非ずと言うのみ。もし天眼の、其の念念に随って滅して生生絶えざるを鑑みる有れば、豈に怖畏せざるべけんや。

すなわち、死んだはずの者の魂が夢に現れたり、よりまし役の童や妾にとりついたり、妻や子に不思議な形で現れたりして、お供え物や福を求めることが少なくないとし、そして様々な苦しみにたえかねると、前世で功德をつまなかつたこと恨まない人はないという。然るに、凡夫は蒙昧であつて未来を見ず、来世があつたとしても現在の生とは無関係だと言ふばかりであると述べ、この世の現象は無常であつて一瞬ごとに滅すると同時に次々に新たな生が生み出されていることを完全に見抜いている「天眼」が存在するとしたら、それを恐れないでよいであろうか、と論ずるのである。「蒙蔽」とは、覆われていて暗いことであり、「心の闇」という言葉を思わせるが、死者の霊が夢に現れたり、よりまし役や妻などに憑依して現れることは、まさに『源氏物語』が描いた事柄であつたことが注意されよう。作者は、この問題に非常な興味を抱いていたのである。

「天眼」についていえば、仏典には「天眼」に関する記述が多いが、顔之推が活動した時期を考えると、南北の地で尊重されていた『涅槃経』梵行品に、次のようにあることが注意されよう。

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

る。『日本霊異記』が重視して孫引きで最も数多く引いている經典は、戒律尊重を説く『涅槃経』であり、「天」の扱いにおいて仏教と儒教の習合が見られる¹⁷⁾うえ、行基などは赤ん坊に化けた鬼を天眼をもって見抜いたと記されている。ただし、行基の場合はその天眼の素晴らしさが讃えられているのであり、天眼を恐れるべきことが強調されているのではない。

一方、『源氏物語』にあつては、「空おそろし」「空はずかし」などの表現は、手習巻の「空おそろし」一例をのぞけば、空蟬、藤壺、源氏、女三の宮、柏木など、密通に関わる状況においてのみ用いられており、こうした用法は『源氏物語』が最初である¹⁸⁾。この「空おそろし」という表現は、かつては「何となく恐ろしい」と訳されていたが、松尾聆氏の提言を受け、最近では、「空（の眼）が恐ろしい」という強い恐怖の意にとる解釈が主流になっている。実際、若菜下巻では、柏木は「空に目つきたるようにおぼえしを」といわれており、「空」とは実際には「空の目」、すなわち、天眼を指すことがわかる。

しかも、『源氏物語』では、天変地異が「ものごとし」にほかならないことがしばしば指摘されており、これは天が不徳の帝をいましめるために災害を下すという儒教の天譴説にほかならない。このことも、『源氏物語』においては「顔氏家訓」と同様、天（空）を媒介として儒教と仏教が交差してい

菩薩摩訶薩住於大乘大涅槃經典修梵行心。以淨天眼見諸衆生造身口意三業不善墮於地獄畜生餓鬼。見諸衆生修善業者命終當生天上人中。見諸衆生從閻入閻。有諸衆生從閻入明。有諸衆生從明入閻。有諸衆生從明入明。（大正十二・四六二中一五）

すなわち、菩薩の淨らかな天眼は、人々が悪行をなして地獄・畜生・餓鬼の世界に落ち、善行をなして天に生まれることを明らかに見ぬくというのである。また、人は無常であつて念念に滅しつつ念念に生まれているとあるのは、衆生とは「生生不断」なる存在であつて、汚れた思いが念念に生ずるため、衆生を「生生」と名づけるのだ、と説く高貴徳王菩薩品の次の箇所などが近い。

善男子。一切凡夫是名生生。何以故。生生不断故。一切有漏念念生故。是名生生。（同・四九〇中）

ただ、『冤魂志』の多くの説話に見られるような中国の伝統的な応報譚にあつては、無実の罪で死んだ者やその家族が訴える対象は、ほとんど天である。そして、非道な殺し方をした者は、やがて悲惨な死をとげるのが常であり、天が罰を行っているように見える。すなわち、帰心篇が恐れるべきものとして強調する天眼は、天が不義の者を罰するという中国思想と習合しているのである。天という概念が仏教と儒教を結び役割を果たしていたことは、早い時期の日本でも同様であ

九七

ることを示していよう。『源氏物語』の仏教の系統については、様々な解釈がなされているが、顔之推作品の影響の強さが知られてみると、門前眞一氏が岡崎義恵氏の主張を考慮しつつ、『源氏物語』では応報の厳しさが目立ち、煩惱即菩提といった教説や鎌倉浄土教などとは異なることを指摘したのは、卓説と言つてよい²⁰⁾。

九八

「空おそろし」という表現は、『源氏物語』成立過程論および構想論と関わる。『源氏物語』については、源氏の栄華が絶頂に達する藤裏葉巻までを第一部とみなすのが通説であり、確かにこの巻はそれまでの巻に区切りをつける性格を持っている。しかし、「空おそろし」やそれに類似した表現が空蟬巻や若紫巻に既に登場し、空蟬、藤壺、源氏らの心情を示す言葉として用いられているのであるから、須磨での遭難程度で源氏の罪が帳消しにされ、藤裏葉巻で「めでたしめでたし」となつて終わるはずがない。源氏と密通した女性はすべて出家しており、その代表であつて仏道修行に努めた藤壺でさえ、罪を消し去ることができず、死後、苦しみを受けているとさされて以上、出家しない源氏には、この上なく厳しい報いもたらされねばならないはずである。天眼を恐れるべきことを説いた顔之推が書いた『冤魂志』では、悪行の報いは、すべて現世での悲惨な死であつた。源氏にはそうした悲惨な死かそれと同等の苦しみ、つまりは生き地獄が用意されねば

ならないだろう。

それにしても、天がすべて見ぬいているという実感はどこから来たのか。『源氏物語』における「空(天)」に対する恐怖は、「天網恢恢、疎にして漏らさず」といった常識だけでは説明できない。あるいは、式部の父為時が、期待していた任官がかなわなかった翌朝に悲嘆して詠んだところ、天皇にまで伝わって感動させた結果、越前の受領に任せられる至ったという有名な詩と関係があるのだろうか。「苦学の寒夜、紅涙襟を濡ほす、除目の後朝、蒼天眼に在り」と詠うこの詩の場合、悲しみの朝に見えるのは「蒼天」だけという「蒼天」とは、苦衷を訴えるべき天、「天道是非か」と問いかけるべき天にはかなるまい。そして、日本では、天と天皇は同一視されがちであり、為時の場合は実際にその天皇の意向を受けて上国の受領に任じられることになったのだから、「桐壺帝が秘密を知ったら……」という源氏や藤壺の恐怖は、後世の人間が想像するよりはるかに強いものだったことだろう。

(f) 親の因果が

『源氏物語』では、「宿世」が大きな役割を果たしていることはよく知られているが、関連することでもう一つ大事なものは、親の因果が子に報いるという点である。仏教は自業自得である以上、自分がなした業は、現世か来世かその先々の世

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

は、光源氏が早くから出家を望んでいながら、あれこれ理由をつけて出家しようとしないうちは、帰心篇のこうした主張を背景としているのではなからうか。出家を望みつつもできずにいるのは、式部自身も同様であることは、『紫式部日記』が示している通りである。

なお、『源氏物語』は僧たちや出家した貴族たちに対して、時にはかなり厳しい目を向けているものの、僧侶の悪行を詳しく記述した箇所はない。密通という話になるのかと思わせる話にしても、近江の君の早口に影響を与えた夜居の僧に関する記述くらいであろう。『源氏物語』が、平安時代には多かつた僧侶の恋を描くのを避けていることについては、今井源衛氏の指摘がある²³⁾。これは、僧侶には戒律を守っていない者もいることを認めたくえで、世には不善の人が多く以上、僧侶の破戒ばかりを責めるのは不当であり、そうした僧侶でも俗人より功德を積んでいるのだとする帰心篇の影響ではなからうか。

(h) その他

『顔氏家訓』雑芸篇のうち、卜筮を論じた箇所では、「陰陽を解する者は、鬼の嫉む所となる」として、卜筮の名人は災難に会って不幸となる例が多いとしている。これが女樂の後で源氏が語る琴論議において、琴を見事に弾くと鬼に魅入ら

において自らが受けねばならないはずだが、父親の後妻と通じて子を作った報いとして、自分の妻に密通されてきた子を我が子として育てねばならないというのは、自業自得というだけでは割り切れないものがある。これについては、『顔氏家訓』帰心篇が個人の輪廻を説きつつも、因果応報の実例としては、親の因果が子に報いる語を列挙していることが注目されよう。『日本書紀』にあっても、早い時期の説話は、親の因果が子や子孫に報いる話ばかりである。『源氏物語』における世代を超えた因果応報と思われる例については、『顔氏家訓』の直接の影響ではないかもしれないが、同じような仏教の受け止め方、つまり一族重視の中国的因果が見られることは事実であり、この点は検討するに値する。

(g) 出家できないこと

帰心篇では、仏教信仰を強調しつつも、出家は多様な仏教のうち「一法なるのみ」と述べ、祇園精舎を寄贈した須達長者と、放生を行った『金光明経』の流水長者の例をあげ、必ず出家しなければならないということはないと断じている。そして、お前たちが「俗計を顧み、門戸を樹立し、妻子を棄てず」にいたいということ、「いまだ出家することあたはずれば」、戒律を守って経典読誦に励めと説いている。すなわち、出家できずにいることを認めるのである。『源氏物語』で

れて不幸となるという箇所のもとであった可能性もある。

雑芸篇では、すこくや困碁の類を論じた箇所の冒頭で、『孔子家語』の「君子は博せず」の言葉を引き、結論では、困碁などは奥深い、人を夢中にならせて仕事を怠けさせてしまつので常日頃やってはならないと説いている。この反例が、すこく好きの近江の君ではなからうか。「長恨歌伝」が「長恨歌」を物語化したように、『源氏物語』は『顔氏家訓』ないし『私教類聚』を物語化したもの、あるいは、そうした形式を利用して人間を描いたものという一面を確かに持っている。

『顔氏家訓』には、このほかにもちよつとしたところで、『源氏物語』が利用していると思われる箇所が多い。しかし、『河海抄』以来、これまで『顔氏家訓』の影響が指摘されたことはなく、最近の論文、西村富美子「源氏物語の儒教」(『源氏物語研究集成』第六巻、風間書房、二〇〇一年)でも『顔氏家訓』については一言も触れられていない。そればかりか、最新の『源氏物語事典』(大和書房、二〇〇二年)に至っては、「源氏物語における儒教」という項目すら存在しない。だが、儒教を無視して『源氏物語』を理解することができのだろうか。『源氏物語』は、『顔氏家訓』に比べれば仏教の比重がはるかに大きいものの、『顔氏家訓』同様に、儒教および儒教的仏教の立場が見られ、重要な役割を果たしているのである。『源氏物語』に対する白居易の影響に関する研究が盛んで

あるように、今後は、『顔氏家訓』の影響に関する研究が重ねられてゆくことになろう。

三 『冤魂志』『王範妾』

(a) 書誌と研究状況

「王範妾」を収める顔之推の『冤魂志』は、冤罪で殺された者が幽鬼になるなどしてその仇に報いた話を集録したものである。子孫である顔真卿が著した顔之推の碑、「贈秘書少卿国子祭酒太子少保顔君廟碑」によれば、「著家訓廿篇、冤魂志三卷」とあり、他にも早い時期の信頼できる資料では三巻としている。ただ、早くに散佚したようで、中国にも日本にも完本は残っておらず、現存するのは、略抄して編集された一巻本のみであり、『法苑珠林』『太平広記』などに諸説話が収録されているにすぎない。現行の一巻本は、宋代に『法苑珠林』からその登場順に抜き出してまとめたものであり、見落としもあることが指摘されている²⁴⁾。後代には『還冤志』『還冤記』『還報記』『還報記』など様々な名で呼ばれている。『法苑珠林』では説話の題名は記されておらず、『太平広記』では「王範妾」としている。一巻本では「孫元弼」となっているため、中国の研究書では、「孫元弼」と呼んでいる場合が多い²⁵⁾。

『冤魂志』が扱った話は、すべて現世での出来事ばかりで『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

敦煌の断簡写本（P二二二六²⁷⁾）では、末尾に「冥宝記」と記されているうえ、『太平広記』でも『冤魂志』を『冥祥記』や『冥報記』と記している箇所があることが示すように、『冤魂志』は早くから仏教説話として受容されており、『冥祥記』『冥報記』と混同されることも多かったようである。『法苑珠林』に多くの話がまとめて収録されているのは、まさにそうした状況を示すものである²⁸⁾。

「王範妾」と『源氏物語』の類似に初めて着目したのは、今井源衛氏であろう。氏は「須磨巻と三月上巳の異変——「王範妾」と「太学鄭生」のこと——」（『国文学 解釈と鑑賞』第六十五巻十二号、二〇〇〇年十二月）において、『太平広記』一二九巻の「王範妾」の概要を述べ、巻一九八の「太学鄭生」にも上巳の日に風が起こり怒涛が押し寄せる話が見えるとし、上巳の日における水辺の遭難という須磨巻の設定は、こうした話に基づく可能性があることを示唆された。阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語②』（小学館、新編日本古典文学全集21、二〇〇三年第五刷）の補註（五三二頁下段）が、三月上巳の日に水辺で遭難する話は『冥報記』に見え、その話は『太平広記』一二九巻に「王範妾」として収録され、同三四巻の「湘中怨辞」も類似すると記しているのは、氏の発見による。『源氏物語』における「心の鬼」は仏教由来のものではないかと考え、鬼が登場する仏教文献を調べていた

ある。それも、『史記』『漢書』『左伝』などの史書・経書のうちに材料を求めた中国伝統の報応譚がほとんどであり、仏教に関する記述がないものが多いため、南斉の王琰の『冥祥記』や唐の王臨の『冥報記』などのような仏教説話とは区別する必要がある。だが、これは仏教の報応が真実であることを儒家たちに認めさせるためのものと見るべきであろう。仏教信仰を語った『顔氏家訓』帰心篇では、聖人に近かった顔回が夭折し、盜賊の盜跖が富んで長寿を保ったのが偶然であるとすれば、積善餘慶、積惡余殃という、諸学派すべてが古代以来認めてきた中国の基本理念がゆらぐことになり、堯・舜・周公・孔子の言葉も偽りとなるが、そうなれば、「いづくに依信する所あつて身を立てんと欲するや」と、顔之推は厳しく問いかけている²⁶⁾。儒教的な立場を堅持し、合理主義を貫こうとするからこそ、仏教の三世因果説を確信するに至ったのである。帰心篇には、殺生に関する単俗な因果応報の実例がいくつか収録されており、これは単行していた小編を後人が挿入したようだが、勝村氏は、こうした追求をどこまでもつきつめた結晶が『冤魂志』であると述べている。『冤魂志』は、今日では六朝志怪小説のひとつとして分類されるのが普通だが、勝村氏は、こうした類の話は、『隋書』『経籍志』では「史伝部雜伝部」に収められていることが示すように、六朝人にとっては史実として信じられていたことに注意している。

筆者は、今井氏の研究を知らずに「王範妾」に出会い、これが『源氏物語』の筋立てと共通する面が多いことに気づいたのである。

(b) 「王範妾」の原文と訳

「王範妾」が『源氏物語』の設定と表現に大きな影響を与えていることは前稿で簡単に指摘したが、ここでは、『伊勢物語』との関係、全体の構想との関係に留意しつつ、詳しく見てゆきたい。まず、原文と翻訳を示しておく。原文は、高麗大藏経を底本としている大正大藏経の『法苑珠林』のテキストによる。

晋富陽県令王範、有妾桃英。殊有姿色、遂与閣下丁豊史華期二人姦通。範嘗出行不還。帳内都督孫元弼、聞丁豊戸中有環珮声。覘視見桃英与同被而臥。元弼叩戸屝叱之。桃英即起、攬裙理鬢躡履還内。元弼又見華期带珮桃英麝香。二人懼元弼告之、乃共誘元弼与桃英有私。範不弁察、遂殺元弼。有陳超者、当时在座、勸成元弼罪。後範代還、超亦出都看。範行至赤亭山下值雷雨、日暮忽然有人、扶超腋径曳将去入荒沢中。電光照見一鬼、面甚青黑、眼無瞳子。曰、吾孫元弼也。訴怨皇天、早見申理。連時侯汝、乃今相遇。超叩頭流血。鬼曰。王範既為事主、当先殺之。

賈景伯孫文度、在太山玄堂下、共定死生名錄。桃英魂魄亦取在女青亭者、是第三地獄名、在黃泉下、專治女鬼。投至天明失鬼所在。超至榻都詣範、未敢說之。便見鬼從外来徑入範帳。至夜範始眠、忽然大驚、連呼不醒。家人牽青牛臨範上、并加桃人左索。向明小蘇、十許日而死。妾亦暴亡。超亦逃走長干寺、易姓名為何規。後五年三月三日、臨水酒酣。超云、今當不復畏此鬼也。低頭便見鬼影已在水中、以手搏超、鼻血大出、可一升許。數日而殂。(大正藏五十二卷、九六一頁上)。

晋の時代、富陽県の県令であった王範は、妾の桃英をかかえていた。桃英は、姿形がきわめて美しかったため、王範の部下である丁豊・史華期の二人と姦通するに至った。王範が出張して帰ってこなかった折、県庁の監督であった孫元弼は、丁豊の部屋で桃英が帯に付けている環が鳴る音がするのを聞きつけ、のぞいてみると丁豊と桃英が同衾しているのが見えた。孫元弼が戸を叩いて「こら！」と言くと、桃英は急いで起き上がり、袴を手にとり鬚をなでつけ、履をつつかけて自室に戻っていった。

孫元弼はまた史華期が桃英の麝香の香りを帯びているのに気づいた。丁豊と史華期は孫元弼がこのことを王範に告げるのを恐れ、孫元弼が桃英に通じようとしたと二人

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一〇三

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一〇四

範の帳の中にもつすぐ入っていくのが見えた。夜になって王範が寝るとすぐ、ひどくうなされだし、何度呼んでも醒めず、家族が黒牛を引いて王範の上からのぞかせ、また桃の木を刻んだ人形や葦を綯った縄を加え(て邪氣払いを試み)たところ、明方に少し蘇生したものの、十日ばかりして死んだ。桃英も突然、死んだ。

陳超は逃げ出して長干寺に入り、名を改めて何規と称した。後、五年たった三月三日に、水辺で酒宴がたけなわになった際、陳超は言った。「今はもうあの鬼など恐れないぞ」と。そして顔をさげて(水に近づける)と、水面下に既に鬼の影がひそんでおり、陳超を手で撃つのが見えた。陳超は、鼻血がひどく出ることに一升ほどであって、数日後に死んだ。

(c) 密会発覚場面の描写の利用

桃英は丁豊の部屋におもむいて同衾していることから見て、「回りの男に手を出して事件を引き起こす、美しくて好色な妾」というお決まりの形で描かれていることが知られる。『冤魂志』自身も他に似た話がいくつかあり、「杜伯」では、周の宣王の妾である女鳩が、大夫であった杜伯に思いをかけて通じようとし、拒まれると「杜伯が私に無理に迫った」と訴え、その結果、無実の罪で殺されてしまった杜伯の幽鬼が、後に

で偽りの密告をしたところ、王範は是非を判別できぬまま孫元弼を殺してしまった。陳超という男がその時、密談の席に加わっており、孫元弼に罪をかぶせるよう勧めた。

県令は任を終えて都に戻った。陳超も都へ行って王範に挨拶しようとした。赤亭山のふもとまで来ると、たまたま雷雨となって日が暮れた。すると突然、人が出てきて陳超の腋をささえ、ただちにひきかたてて荒野に連れて行った。電光が一人の幽鬼を照らしたすと、その顔はどす黒く、目には瞳が無かった。幽鬼は語った。「わしは孫元弼じゃ。怨を皇天に訴え、すぐ無実を認めていただいだぞ。ずつとお前をうかがっていたが、やっと会えたな」。陳超は、頭を地にうちつけて許しを請い、頭から血を流した。幽鬼は語った。「王範は、張本人なのだから真つ先に殺してやる。(学者として名高い)賈景伯および(孝行と兄弟思いで有名な)孫文度が泰山の死者裁判所でもに死者の名簿を作成しており、桃英の魂も女青亭というところに行くものとして名が録されているぞ。これは第三地獄の名であり、黄泉の下にあつて、もっぱら女の死者に罰を与えるところだ」。明方になると、鬼の姿を見失った。陳超は都に行き、王範に挨拶した。事態について言い出せることができずにいると、幽鬼が外から来て王

宣王をとり殺したとされている。そのような自分から働きかける好色な女が、知り合い同士である男二人と通じ、同衾現場を発見されてあわてふためいて逃げていくという設定は、紅葉賀の巻において、源氏と源典侍と同衾しているところに源氏の仲間であつて先に源典侍に通じておいた頭中将がふみこみ、おどかす場面に利用されている。「直衣ばかりを取り」て屏風の後ろに隠れた源氏が、「しどけなき姿にて、冠などちゆがめて走らむ」のは愚かしいと思ふ箇所の表現が、「裙を攪り鬢を理へ」て逃げかえった桃英の描写によつては、は明らかであろう。年老いてなお好色な源典侍については、『伊勢物語』のつくも髪の老女が背景にあることはいままでもない。すなわち、『源氏物語』は、『伊勢物語』におけるつくも髪の老女と在五中将との交情の話に、この「王範妾」を重ね、桃英が逃げ出す姿を源氏が逃げようとする際の様子に置きかえたのである。源氏については、「女として見たい」という評語がしばしば用いられているが、『源氏物語』が「王範妾」を利用するにあたっては、このように男女の役割を取り替えるなど、設定の一部を逆にしたり、極度に強調したりしている場合が多い。これは、日本の状況にあわせるためだけでなく、『伊勢物語』や「長恨歌」などのように文学として尊ばれていた作品と違い、「王範妾」は典拠として踏まえていることを誇って示すことができる類の文献でなかったことも一因となっ

ていよう。なお、阿部秋生氏は、源典侍の異質さに着目し、この事件は帚木系の巻が若紫系から分離する起点となっていると指摘している。³⁰⁾ そうした重要な話が、「王範妾」に依存しつつ書かれているのである。

朧月夜の場合は、激しい雷がややおさまった雨の朝に、娘の部屋に無思慮にも歩み入った右大臣が、顔を赤らめて御帳台から出てきた朧月夜の衣に男物の帯がからまっているのに気づき、さらに男からの手紙まで発見し、几帳からのぞきこんだところ、御帳台の中にしどけない様子で横になって顔を隠している男を発見して驚き、長女で気性が激しい弘徽殿大后にご注進しに走っている。つまり、桃英が帯につけている環に代わって源氏の帯が密会発覚のきっかけとなっているのであり、ここでも源氏は桃英のように色っぽい姿で描かれていることになる。「王範妾」では、孫元弼は、同衾している二人を発見したものの、警告を与えただけで部屋には踏み込まずに去ったようであり、沈着な行動をしているのに対して、右大臣は、自分の娘とはいえ、帝に寵愛されている尚侍である妙齢の朧月夜の部屋の中へ、早口でしゃべりながらずかずかと入り込んでくるなど、軽薄このうえない言動をしていることから見て、孫元弼とは正反対のタイプとして描かれていることになる。源氏は、絶体絶命の立場に追い込まれておりながら、舅である左大臣とのあまりの品格の違いに思わず笑

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

一〇五

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

一〇六

ことを指摘し、特に源典侍と朧月夜はシンメトリックなまでに似ていることを指摘されているが、それはともに「王範妾」を利用して一因となっている。

なお、好色な女と同衾場面を描くという点で見落とせないのは、夕顔である。頭の中將の思い者であった身で自ら源氏に歌を詠みかけるなど、遊女的な性格が指摘されている夕顔の場合は、廃院での一夜では発覚する恐れが無かったためか、脱ぎ捨てた衣服に関する記述はないが、寝入った源氏と夕顔が妖物に襲われ、源氏が太刀を抜いて邪気払いをしたにもかかわらず、夕顔が息絶えてしまうのは、王範の帳の中に入っていた幽鬼が寝ている王範にとりつき、家族があれこれ邪気払いしたにもかかわらず、王範が死んでしまうことを思わせる。源氏が邪気払いするのは、「王範妾」の右の記述を踏まえたものであろう。³³⁾

このように、夕顔・源典侍（頭中將とその友人の源氏）、朧月夜（源氏とその異母兄である朱雀帝）、藤壺（桐壺帝とその子である源氏）というように、源氏の知り合である男と関係のある女と源氏との同衾場面が、すべて「王範妾」の記述を利用したものとなっていることが注目されよう。『源氏物語』では、知り合い同士である二人の男と関係を持つ女としては、源氏の正妻でありながら無防備であって柏木による密通を招いてしまった女三宮と、薫に思われながらも匂宮に迫

ってしまったが、そうした比較の元になっているのは、実は謹厳な孫元弼なのである。

若紫の巻における藤壺との密会場面では、密会の後、源氏と藤壺の間で『伊勢物語』の斎宮と業平を思わせるような夢を主題とした和歌が詠みかわされた後、「命婦の君ぞ、御直衣などはかき集めてもて来たる」とある。「かき集めて」という表現は、激情に駆られた源氏が自らの衣服を脱ぎ散らしたところ、また、手引きした命婦が発覚を恐れつつ急いでその衣服を集め、源氏をせかして送り出したらしいことを示しており、そうした記述によって、源氏と同様にしどけない姿をしている藤壺の様子がうかびあがってくる仕組みになっている。ここでも「裙を攪」ってあわてて逃げ帰った桃英の描写が利用されているが、急いで服を手に行っているのが女房であるのは、身分の高い中宮との密会なればこそである。「王範妾」の表現に近いのは、源典侍、朧月夜、藤壺という順序であり、これは女の好色度に比例し、身分の高さと反比例しているようである。朧月夜は、もともとあだっぽい性格の持ち主であるうえ、周囲の反対をおしきって源氏との恋を貫こうとした点、それも尚侍となって朱雀天皇に寵愛されるようになった以後もそうであった点では、積極的と評さざるを得ず、広い意味での好色ということになる。³⁴⁾ 三谷邦明氏は、源氏と源典侍との一件は、藤壺ならびに朧月夜との密会のパロディである

られて匂宮を忘れられなくなり、遊女を思わせる名で呼ばれる浮舟がいるが、夕顔と同様、物の怪にとりつかれるという共通点も持っているこの二人については、外部の典拠に基づく面よりも、『源氏物語』自身の先行する巻に基づく面が大きいのではなからうか。『源氏物語』にあつては、『源氏物語』において扇は複数の男と関係を持っている好色な女というイメージと結びついている場合が多いことは、原岡文字氏が指摘しており、その扇の形状が具体的に描かれているのは、夕顔、源典侍、朧月夜、女三宮、浮舟に限られることは、鈴木裕子氏の指摘がある。³⁵⁾ この女性たちは、「王範妾」の記述との類似が見られる例として本稿がとりあげた女性たちと重なっていることが注意されよう。このことは、『伊勢物語』における后との密通を背景とする藤壺は、自分から働きかける好色性は無いにせよ、恋の情緒を解する女性という点で、真の意味で好色な女性として扱われていた可能性を示すものである。この点は、『伊勢物語』を受けている空玉蟬も同様である。これに対して、源氏一人しか知らない女君、たとえば、葵の上、末摘花、花散里、明石君、あるいは源氏とも交渉がなかった朝顔の姫君などについては、「王範妾」と『伊勢物語』の双方を利用した例は見当たらない。葵の上が斎院の御禊の日に六条御息所と車争いを起し、後で御息所の生霊に襲われる点は、「王範妾」を受けていると思われるが、「王範妾」の登

場人物とは重ならないうえ、『伊勢物語』にも葵の上のような女性は見えない。末摘花についても、こうした女性は『伊勢物語』「王範妾」には登場しない。花散里は、『伊勢物語』でいえば、「形より心まさる」女にあたると思われることもでき、また、『顔氏家訓』治家篇において、織物や刺繍などについては南地の女性より「大いに優る」とされる北地の女性たちが背景にある可能性も否定はできないが、関係は明確ではない。明石の君は、『伊勢物語』百十七段における住吉大神の庇護を詠んだ歌³⁶を背景としているとはいえ、明石の君のような女性は『伊勢物語』には登場せず、「王範妾」の影響もうかがわれない。齋院を勤めた朝顔の姫君は、『伊勢物語』の齋宮を背景としつつも、『源氏物語』では重要な役割を演ずることなく終わっている。

重要な紫の上については、『伊勢物語』四十一段の紫のゆかり、四十九段の若草の女などを受けているものの、「王範妾」の影響は明確でない。齋院の御禊の祭のさ中に六条御息所の霊に襲われることは、御禊の日に車争いを起こして後に御息所の生霊に襲われた葵の上の場合と似ており、禊の日に陳超がとり殺される「王範妾」と共通するが、登場人物が重ねられているとはいいがたい面がある。ただ、紫の上は、特別な人物であって、物語の途中で性格が変わっていくにつれ、「王範妾」との共通性が増してゆくようにも見えるため、検討が

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

一〇七

『源氏物語』における顔之推作品の利用（石井）

一〇八

実際、源氏が雲林院から出てくると、右大臣側の頭弁には、源氏が謀反の心を持っているかのようであてこすりをされており、これは「王範妾」における偽りの密告に近い。そうした中で、朧月夜との逢瀬を控えていた源氏に、さびしく思うという歌が朧月夜の方から届けられ、やがて朧月夜がわらわ病みになって里邸に下ると、弘徽殿太后もともに住むその屋敷に、『伊勢物語』の男のように危険も顧みずに夜な夜な通うようになり、発覚に至ったのである。

(e) 六条御息所

六条御息所については、齋宮を勤めたのちに女御となる娘を生んだ女性、また六条御息所と呼ばれた女性が歴史のうち难求められ、幾人かの候補、ないし、そうした設定にヒントを与えた女性が推定されている。ただ、それらの女性に限らず、『源氏物語』以前の時期において、高貴な女性が生霊や死霊として執念深くたたったことを伝える記録は発見されていない。菅原道真の怨霊事件などが六条御息所の造型に影響を及ぼしていることは疑いないが、道真の怨霊は、あくまでも権力争いの中で登場したものであり、恋に関する恨みは関係ない。そこで着目されるのが、「王範妾」の孫元弼である。「王範妾」では、孫元弼と桃英の関係については何も説かれていないが、源氏に寄せる六条御息所の思いの描かれ方を見てい

必要であろう。

(d) 須磨をめぐる記述での利用

雷雨の朝、朧月夜と源氏の密会を目撃した右大臣にそのことを知らされ、激怒した弘徽殿太后は、源氏を追い落とす策を練り始めている。その結果、源氏は、密談のうえで偽りの密告をされて殺された孫元弼と同様、まもなく不穏な噂を流されて危機に陥り、自ら都を去るに至る。ここでは、雷雨の中で後の二条の后を鬼に、つまりは二条の後の親族に奪われる段の後に、都にいらなくなった業平の東下りの段が続く『伊勢物語』と、不義発覚、追い落としの陰謀、雷雨の中で鬼の出現、寺への逃げ込みという道筋が語られる「王範妾」との表現の類似が目立つが、前稿に譲る。

なお、『源氏物語』では、寺への逃げ込みは、この直前の時期に、雲林院への参籠という形でなされている。参籠は、藤壺との間が思うようにならないことが直接の原因ではあったが、朧月夜との密会を右大臣に発見される前に、右大臣側の藤少将に見つけられており、非難が起きることが語り手によって予告されているうえ、右大臣・弘徽殿太后側の圧迫が強くなっていった時期だけに、そうした圧力から逃れるという面もあったであろう。寺から出てくるのは危険なことであった。

ると、式部は、孫元弼のとてつもない執念深い復讐には恋の恨みも関わっている、と見ていたように思われる。つまり、遊びで浮気していたらしい丁豊や史華期と違い、孫元弼こそが最も強く桃英に心ひかれていたのであって、その恋心を生来の謹厳さによって押しとどめていただけではないかと、式部は考えていたように思われるのである。そうした視点で、「王範妾」を眺めてみれば、丁豊の部屋で桃英の環の音がしたのに気づいたのも、史華期が桃英の麝香の香りを帯びているのに気づいたのも、日ごろから桃英のことを気にしていたからだということになる。その桃英に裏切られたとなれば、怨みが深くなるのは当然のことである。しかし、「王範妾」では、桃英への復讐は、細かく描写されておらず、何日もうなされてめざまなかつた王範の苦しい死に様と、陳超に対する異様に執念深い追い詰め方が中心となっている。すなわち、桃英のことを激しく憎むようになったはずでありながら、事件の責任者であった王範を真っ先に殺すのだと宣言し、実際に、桃英の主人である王範の方を先に殺しているのである。これは、車争いは、祭のさ中に従者たちが酒に酔っておこなった仕業であるとはいえ、源氏は噂を聞いて御息所に同情し、自らの正妻である葵の上の責任者であると考えていることと対応しているように見える。

六条御息所は、本来ならば、自分を捨ててかえりみない源

氏にとりつくべきであろう。自分の生霊が葵の上を苦しめて
いるという噂を聞いた御息所は、自分はわが身の不運を嘆く
のみであって、「人をあしかれ(人の身に悪いことが起きるよ
うに)など思ふ心もなければ」、もの思いすると体からあこが
れ出るといわれる魂が本当に出ていったかもしれない、と考
えるが、「人を痛めつけようとは思わないものの」という点に
やや近いのは、『冤魂志』の「牛牧寺僧」であろう。

劉宋の高祖が桓玄を平らげた後、撫軍將軍であった劉毅
は、牛牧寺の僧が桓家の子供を隠して出家させたとして、
四人の僧を殺した。その夜、僧がやってきて、「どうして
私をみだりにお殺しになったのか。私は既に天帝に告げ
ておきました。あなたは長くはないでしょう」というの
を夢に見た。のち、劉毅は戦に敗れ、牛牧寺に至った。
寺の僧が言った。「將軍はかつて我が師をみだりに殺しま
した。わが師はもちろん、仇に報いるなどということをし
するはずはありません(自無報仇之理)。しかし、どうし
てここに來られたのですか。亡き師は、しばしば靈験を
示したお方であって、天帝が將軍を寺にとりこんで殺す
だろうと言っておりました」。劉毅は歎いて寺を出て、岡
の上の大樹にのぼってみずから首をくくって死んだ。

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一〇九

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一一〇

あろう。御息所の場合、その恋心には、恨みがともなってい
る。

(f) 薫の匂い

偽作説もある匂兵部卿の巻に関して注目されるのは、薫は
生まれつき匂いが格別であり、人目をしるんで立ち寄る女性
のところにもそれと分かる香りがただよって露見してしまう
ことが冒頭で述べられている点である。「王範妾」の桃英は、
妖艶な香りである麝香を身につけており、それが密通発覚の
きっかけになっていること、また薫は不義の結果生まれた子
であることを考えると、薫のこの匂いは、「王範妾」を踏まえ
て不義の匂いとして設定されたように思われる。実際、薫は
友人である兵部卿宮に庇護されている中の君に恋心を訴える
に及んでおり、その際、中の君に残った薫の移り香が匂宮の
疑惑を招いている。薫は男であるうえ、優柔不断であって禁
じられた関係に踏み込むことはできず、この点は、桃英とは
反対になっているが、『源氏物語』では、「王範妾」の人物や情
景を利用する際、男と女の設定や性格の設定を逆にするなど、
一部変更を加えるのが常であったことを考えると、ここもそ
うした一つであった可能性が出てくる。そうなると、匂兵部
卿の巻は、宇治十帖以前と同様、式部の筆ということになり、
別人が書いた場合は、「王範妾」が種本であることを知ってい

この話は、「王範妾」と同様、「右一驗出冤魂志中」として、
『法苑珠林』卷七十三(大正五十三・八四一中)に収められて
おり、この話に続けて、『顔氏家訓』帰心篇末尾に見える殺生
に関する応報譚が並んでいる。ただ、『源氏物語』には、「王範
妾」以外には『冤魂志』の説話を思わせる箇所は見当たらな
いため、直接の影響はないであろう。

なお、「身ひとつのうき歎きよりほかに人をあしかれなど思
ふ心もなければ」というのは、裏をかえせば、それだけ自分
のことにこだわっていて他人など問題にしないというこ
とでもあろう。しかし、実際には、その誇り高さは、見下し
ている他人に容易にゆるがされてしまうものであり、傷つけ
られやすいのである。『源氏物語』においては、空蟬の自尊
心、その空蟬に拒まれ、自分は伊予介以下なのかと苦しむ源
氏の自尊心など、自尊心が恋とならんで大きな役割を果たし
ていることに注意する必要がある。

孫元弼の幽鬼が陳超を禊の祭の日に襲ったように、六条御
息所が禊と結びつけて描かれている箇所は、前稿で触れた以
外にもある。すなわち、伊勢に齋宮としておもむく娘につい
てゆく以上、当然なようであるが、御息所に関する記述には、
野宮での禊を含め、しばしば禊が言及されるのである。これ
は、『伊勢物語』の男と同様、どれほど禊を重ねて恋心がおさ
まるよう祈っても、抑え切れなくなっていることを示すので

る人の作ということになる。なお「王範妾」や『顔氏家訓』
の明らかな影響が見られるのは若菜の巻あたりまでであって、
以後は急に目立たなくなるように思われる。これは、以後の
巻は、外部の文献ではなく、『源氏物語』のそれ以前の部分に
基づいている部分が多いためと思われるが、若菜以降の巻に
おける顔之推作品の利用というのは、これから調べてゆかね
ばならない課題である。

五 結び

以上、『顔氏家訓』と「王範妾」とを『源氏物語』がいかに
利用しているかを眺めてみた。まだ手探りを始めたばかりの
段階であり、本格的な説明は今後の研究にゆだねばならない
が、不思議なのは、『顔氏家訓』と「王範妾」が『源氏物語』
にこれほど大きな影響を及ぼしているながら、これまで無視さ
れてきたのはなぜなのかという点である。仏教や儒教を排斥
した本居宣長、およびその影響を受けた国学者・国文学者で
あれば、儒教の教訓書である『顔氏家訓』や仏教説話という
扱いを受けていた「王範妾」などに注意を向けなかったのは
当然である。しかし、中世の学識ある貴族や契沖などであれ
ば、『顔氏家訓』や『法苑珠林』などには通じていたはずであ
り、その彼らでさえ類似に気づかなかったのは、なぜなのか。
おそらく『源氏物語』となれば、日本であれば『伊勢物語』

や『古今集』、中国であれば白居易の作品や『史記』など、すぐれた文学作品ないし権威ある古典を典故として踏まえているはずだ、という思い込みがあったためではなからうか。昭和六十年前後から『竹取物語』の影響に関する研究が進み、また唐代伝奇などの類似が調査されるようになったのは、そうした先入観がようやく薄らいできたことを示すのであろう。すなわち、子供向けの荒唐無稽な物語とされてきた『竹取物語』や、近代以前にはまっとうな文学とはみなされていなかった唐代伝奇などが、再評価されて文学史の中に位置づけられるようになったからこそ、『源氏物語』に対する影響が調査されるようになったのである。

とはいえ、その素朴な『竹取物語』にしても神秘的な美女をめぐる恋物語であり、唐代伝奇にしても恋愛話がかなり含まれている。そうした話が典故探しの対象となったのであるところが、これまで見てきたように、『源氏物語』は、恋愛とは無縁の文献、それも文学作品でない文献を重要な典故とし、それを自在に変容して『伊勢物語』に重ね合わせることでよって長大な物語をつむぎだしていた。こうしたやり方の先駆となったのは、仏教教理を恋物語や恋歌に利用した『伊勢物語』それ自身であり、そして同様に仏教教理を利用した様々な和歌、特に『古今集』に収められた和歌ではなかったろうか。式部は、『伊勢物語』や『古今集』については、幼い頃から『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一一一

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一一一

留意しつつそれぞれの巻の登場人物の描かれ方を見てゆけば、『源氏物語』の成立過程を推測する際にも役立つはずである。また、仏教説話として扱われてきた「王範妾」と儒教の教訓書たる『顔氏家訓』の利用の仕方を明らかにすることは、紫式部にとって仏教および儒教とはいったい何であったのか、という問題へと我々を導くものといえよう。

註

(1) 実際には、典故として著名な作品の利用法に関する研究もまだ不十分である。たとえば、雨夜の品定めにおける源氏について、「添ひ臥し、……うちねぶり(居眠りし)、……眼覚まし、……人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけ、……明かしたまひつ」と記されているのは、『伊勢物語』第二段の「おきもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめくらしつ」を踏まえたものであり、「ひとりのみにもあらざ」る女を「かのまめ男、うち物語らひて、かへり来て」いる状態であったことをほのめかしている。同様のことは密通直後に「ながめ臥し」ていた柏木についてもあてはまる。また、品定めにおいて、各人が雄弁に語る間、源氏が沈黙を守り続けているのは、諸菩薩の論議を聞く沈黙の体現者、維摩の姿をかすかな背景としている可能性が強い。今後は、ひとつの文における典故でなく、こうした場面全体の典故についても考慮する必要があるだろう。なお、若紫巻では、藤壺が里に下ると、源氏は「かかるをりだに

らくりかえし読んで血肉化してただけでなく、その成立に關する裏話、個々の歌の成立事情についてもある程度知っていたように思われる。先に触れたように、曾祖父の兼輔は、貫之や躬恒を保護し、彼らから敬愛されていた人物である。

貫之の歌集には兼輔との交流を示す記述が多くいうえ、兼輔の息子の雅正も、貫之とつきあいがあった貫之の歌集に名が見えている。そうした曾祖父や祖父から父の為時へと伝えられた裏話を、式部は興味深く聞いたことだろう。『源氏物語』にしばしば貫之の名が見えているうえ、物語論では『古今集』仮名序が引用され、また躬恒の歌が重要な心理描写のところではしばしば利用されるのは無視できない。為時は、当時を代表する漢詩人の一人なのであるから、その他様々な文学関係の情報が集まってきたはずである。そのうえ、『伊勢物語』のヒロイン、二条の后として知られる藤原高子は、式部の母方の祖である長良の娘であった。狭い貴族社会のことであるから、式部はこうした親戚筋からも高子や業平の実像、そして『伊勢物語』の成立に関する噂をかなり耳にしていたと思われる。『伊勢物語』は、式部にとって、身近に感じられる女性モデルとした話であったことに注意すべきであろう。

『源氏物語』は、その『伊勢物語』の登場人物たちに顔之推作品の人物・場面の設定を少し変えただけで重ねることによって、人物を造型してゆくという方法をとった。この点に

と、心もあくがれまどひて、……昼はつれづれとながめ暮らして」おり、ここでも『伊勢物語』第二段(と第六十五段)が利用されていることが注意される。

(2) 『顔氏家訓』に関する主な訳注・研究としては、周法高『顔氏家訓彙注』(中文出版社・台湾国風出版社、台北、一九六〇年)、王利器『顔氏家訓集解』(上海古籍出版社、一九八〇年。増補本、一九九三年、中華書局)、宇野精一『顔氏家訓』(明徳出版社、一九八二年)、宇都宮清吉『顔氏家訓1・2』(東洋文庫五一四、平凡社、一九九〇年)などがある。本稿では、テキストは王利器(増補本)に拠り、訓読は私案による。

(3) 瀧川政次郎「私教類聚の構成とその思想」(『史学雑誌』第四十一編、一九三〇年)。

(4) 瀧川、注3、前掲論文。

(5) 宋・元・明の三本、および宮内庁本は「冤」に作る。

(6) 『法苑珠林』と『諸経要集』の関係および違いについては、山内洋一郎「法苑珠林と諸経要集」(『金沢文庫研究』二十卷九号、一九七四年九月)。

(7) 石井「心を探る文学——『源氏物語』の唯心思想——」(『文学』二〇〇三年七月号、岩波書店、二〇〇三年七月)。

(8) 原文は「誠孝」だが、これは隋の文帝の父の諱を避けるためのものであり、「忠孝」の言い換えであることは、王利器、一頁。

(9) 『源氏物語』の本文については、阿部秋生・秋山虔・今

井源衛・鈴木日出男『源氏物語(1-6)』(小学館、新編日本古典全集21、一九九四―八年)による。

- (10) 石井公成「見仏から恋歌へ——『古今集』の仏教的背景——」(駒澤大学「仏教文学研究」6号、二〇〇三年三月)注26、九一―二頁。

(11) 三史については、当然ながら、注釈に頼って読むことになるが、『漢書』に関する代表的な注を書いたのは、顔之推の孫である顔師古であった。顔氏一族の学問および顔師古については、吉川忠夫『六朝精神史研究』第IV部「顔氏研究」第九章「顔之推論」第十章「顔師古の『漢書』注」(同朋社出版、一九八四年)。

(12) この点については、物語論議の中で続いて言及される「方便」とからめて論ずる必要があるため、別稿において『源氏物語』の仏教について検討する際に取り上げることにはしたい。

(13) 「世人」の語が仏教由来のものであることは、石井、注10前掲論文、八十六―七頁。

(14) 直接、心理を描いた部分だけでなく、情景描写がそのまま空蟬の心理を物語るものとなっていることは、鈴木裕子「空蟬物語」を読む」(駒沢短期大学研究紀要」二十二号、一九九八年三月)。

(15) 『源氏物語』において「史記」、特に呂后の件が重要であることは、田中隆昭「源氏物語 歴史と虚構」第四章「源氏物語と史記」(勉誠社、一九九三年)。

(16) 石井公成「『日本霊異記』における『涅槃経』の意義」

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一一三

『源氏物語』における顔之推作品の利用(石井)

一一四

九八七年)という論文もあり、有益である。

(24) 勝村哲也「顔氏家訓帰心篇と冤魂志をめぐって」(『東洋史研究』二十六卷三号、一九六七年十二月)、小南一郎「顔之推「冤魂志」をめぐって——六朝志怪小説の性格——」

(『東方学』第六十五輯、一九八三年一月)。

(25) 中国・台湾の研究のうち、本稿で参照したのは、以下の通りである。周法高「顔之推還冤記考証(上・中・下)」(『大陸雜誌』二十二卷第九―十一期、台北、一九六一年五月・六月。後に同『中国語文論叢』に収録)、王国良「顔之推冤魂志研究」、文史哲出版社、台北、一九九六年、羅国威「冤魂志」校注、巴蜀書社、成都、二〇〇一年)、李劍国「唐前志怪小説輯釈」(文史哲出版社、台北、一九九六年)。日本では、主なものとしては、勝村氏・小南氏の注24前掲論文のほか、勝村「六朝隋唐の神史・小説の整理に関する覚書——仏教説話とくに冥祥記を中心に——」(『浄土教の思想と文化』(恵谷隆戒先生古稀記念会、一九七二年)、小南「六朝隋唐小説史の展開と仏教信仰」(福永光司編『中国中世の宗教と文化』、京都大学人文科学研究所、一九八二年)などがある。

(26) 勝村、注24、前掲論文。

(27) 重松俊章「敦煌本還冤記に就いて」(『史淵』第十七輯、一九三七年十二月)。

(28) 前野直彬『唐代伝奇集2』(東洋文庫)も、『太平広記』に基づいて、「王範姜」を「冥報記」の話としており、「幽霊の復讐」という題名に変えて収録しているが、意識すぎ

(『駒沢短期大学 仏教論集』五号、一九九九年十月)。

(17) 石井公成「感応する天——『日本霊異記』の重層信仰——」(駒澤短期大学研究紀要」第二十七号、一九九九年三月)。「天」とならんで重要なのは、中国仏教の概念としての「孝」であろう。田中徳定「「不孝」とその罪をめぐって——『源氏物語』にみえる「不孝」とその罪の思想的背景——」(『駒沢国文』第三十二号、一九九五年二月)。

(18) 川村佐和「源氏物語における「空」意識と密通」(『國學院大學大学院文学研究科論集』第十三号、一九八六年三月)。

(19) 松尾聡「平安時代物語論考」(『帚木卷の「空恐ろし」』(笠間書院、一九六八年)。

(20) 門前眞一「源氏物語新見」(『源氏物語の罪と応報の問題』(門前眞一教授還暦記念会、一九六五年)。

(21) 石井、注17前掲論文、四〇―二頁。後述するように、『源氏物語』の明石巻でも、朱雀天皇が「王範姜」の「皇天」にあたる役割を果たしている。

(22) 帰心篇に触れつつこの問題を追及したものとして、前田繁樹「業報と注連の間——親の因果は子に報いるか——」(『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年)があり、伝統的応報観と道教の例が報告されている。

(23) 中村真一郎・今井源衛・大野晋「座談会——『源氏物語』をどう読むか」(『源氏物語をどう読むか』、『国文学 解釈と鑑賞』別冊、一九八六年四月、二五六頁)。今井氏には、「平安朝における僧侶の恋」(『源氏物語の思念』、笠間書院、一

て問題と思われる箇所がある。

(29) 女青亭は、道教の北都羅鄂山三十六獄のうち、北列の三番目にある女青獄を指す。王国良、前掲書、九七頁。女青亭に関する記述は、注釈がまきれこんだようにも見える。

(30) 阿部秋生「光源氏の容姿」(『東大教養学部 人文科学科紀要』四輯、一九五四年六月)。

(31) 真の意味での好色については、劉力「好色」と「色好み」について(内藤幹治「今、なぜ中国研究か——古典と現代——」(東方書店、二〇〇〇年)、諸田龍美「好色の風流——「長恨歌」をささえた中唐の美意識——」(『日本中国学会報』五十四集、二〇〇二年十月)。

(32) 三谷邦明「物語文学の方法(二)」「源典侍物語の構造」(『有精堂出版、一九八九年)、同『源氏物語の躰糸』(『反復する藤壺事件』(一九九一年、有精堂出版)。

(33) 闇の中で太刀を抜くという点では、源典侍と源氏の同衾現場に踏み込んだ頭の中將が、太刀を抜いて無言で源氏を威したのと対応している。なお、源氏が東山で夕顔の遺骸を見て帰る際、気分が悪くなって馬からすべり落ちたと記されているが、『太平御覧』卷三五九が引く謝氏「鬼神列伝」では、水辺で鬼を見た陳超が馬に乗って逃げるのを幽鬼が追いかけたとされており、関連している可能性もある。『鬼神列伝』の日本伝来は不明であるが、『太平御覧』は、刊行されて間もなく日本に伝わっており、『御堂関白記』寛弘七年(一〇一〇)八月廿九日条によれば、道長は棚厨子を作って「三史・八代史・文選・御覧・道々書・日本記(紀)

具書等、令・律・式等具、并二千余卷」を収めている。ここでいう「道々書」とは、類書の後に置かれていることから見て、「道々しき」経書ではなく、それぞれの道の書、つまり、陰陽・天文・医学その他の術に関する専門書であろうか。

(34) 原岡文字『源氏物語』両義の糸」、「一 遊女・巫女・夕顔——夕顔の巻をめぐって——」(有精堂、一九九一年)。

(35) 鈴木裕子「源氏侍攷——物語世界の悪戯者——」(「駒沢短期大学研究紀要」第二十三号、一九九五年)。

(36) この歌は、『法華経』における久遠からの教化を背景としており、神仏習合の早い例として注目される。

(37) 「王範妾」や『顔氏家訓』がこれほど用いられている以上、その古訓と『源氏物語』の異本を比較すれば異本研究にも役立つ可能性があることを、大内英範氏にご教示いただいた。

『源氏物語』における顔之推作品の利用 (石井)

一一五

『源氏物語』における顔之推作品の利用 (石井)

一一六